

研究科内公募プロジェクト要旨

子どもの学びを核としたコミュニティ・スクールの構想

—長野県木島平村を事例として—

代表 邊見 信（基礎教育学コース）

古仲 素子（同上・日本学術振興会特別研究員 DC）

園部 友里恵（生涯学習基盤経営コース）

本田 哲也（学校開発政策コース）

村上 純一（学校開発政策コース）

指導教員 小国 喜弘（基礎教育学コース 教授）

1. 問題関心

本研究の問題関心は、研究対象とする木島平村の現状への洞察と、現在ある以下の2つの流れについての関心から形作られたものである。

第一に、「開かれた学校づくり」あるいは「地域とともにある学校づくり」といった言葉で象徴される、学校と地域が一定の関係を取り結んでの学校づくりが進められつつある流れである。本稿が対象事例とした木島平村においても、村にそれぞれ1校ずつの小中学校において、コミュニティ・スクール化に向けた取り組みが進められている。

第二に、とくに農山村地域において顕著な過疎化・少子高齢化の流れである。木島平村もその例外ではなく、村の高齢化率は全国平均を大きく上回り、進学等を考えたときに若者が一度村を出ることも常になっていると言える。

本稿において木島平村での「地域とともにある学校づくり」の試みを追うことは、過疎化・少子高齢化に悩む今日の農山村における学校教育のあり方そのものを考える契機となりうると確信している。

2. 対象事例・研究目的

本稿は、長野県木島平村の教育実践及びコミュニティ・スクール化の過程を対象として取り上げる。

現在、木島平村においては、1校ずつの小学校・中学校を舞台として、「小中一貫コミュニティ・スクール」の設置に向けた試みがなされているところである。コミュニティ・スクール設置までの準備期間は2012(平成24)年度～2013(平成25)年度の2年間設けられており、

本年度はその2年目にあたる。

本研究では、中学校でコミュニティ・スクール化以前に進められてきた実践に具体的に踏み込み、その詳細を明らかにする。そして、そうした実践がコミュニティ・スクールとしての教育活動にどう結びつきうるのか、その中に子どもがどのように参画し、位置づいていく可能性があるのかについて、考察していくことを目的とする。

3. 先行研究の整理

本稿の先行研究として位置づけられる、コミュニティ・スクールに関する研究、及び、地域と連携した活動・地域学習に関する研究を整理する。

まずコミュニティ・スクールに関する先行研究は、以下の2つに整理できる。ひとつは、学校運営協議会の機能に着目し、コミュニティ・スクールを「学校ガバナンス」という視点から分析しようとする研究であり、もうひとつは、「学校支援」という側面から分析しようとする研究である。これら先行研究の蓄積においては、多くが学校長の立場に着目したものであり、保護者や地域住民、子どもの視点からコミュニティ・スクールを捉える研究は少ないことが指摘できる。

つぎに、コミュニティ・スクールにおける学校と地域とが関係を取り結んでの活動については、主に活動に中心的な立場で関わっている人々による実践記録の蓄積がある。それらは、メインとなっている地域住民の活動や教育活動の内容を記述しているが、「周縁的な立場で学校の活動を支援する人々や、授業場面ではむしろ重要な存在である教員や子どもたちの声が

取り上げられることは少ない。また、単発的な取り組みが紹介されることが多く、教育課程全体におけるそうした取り組みの位置づけが把握しづらいことも指摘できよう。

また、コミュニティ・スクール指定を受けていない学校においても、地域学習は進められてきた。それらを扱った先行研究は、主に授業場面に限定して分析したものであり、地域住民が授業に参画することが学校経営全体にどのような影響を与えているか、地域住民はどうか認識しているかなどについて詳らかにされていないことが指摘できる。

4. 得られた知見

本稿では、ここ数年木島平中学校で取り組まれている「KJH 農村文明塾」「村長への提言」の実践に着目した。まず、第1章で先行研究について述べた後、第2章では、両実践の担当教員や、地域講師および実践に参加した卒業生へのインタビュー、さらに関連資料を分析することによって、実践のねらいや課題を当事者たちの語りに即して解明した。

その結果、「KJH 農村文明塾」実践の検討を通して、学校側の「この村で育ってよかったという気持ちを持ってほしい」とのねらいがあったこと、実際の講座では地域講師による創意工夫、積極的に学ぶ生徒たちの姿が浮かび上がってきたと同時に、地域講師と教員の連携においてある種の緊張関係が見られることも指摘できた。「村長への提言」実践においては、子どもたちの成長に関する教員の思いと、村の将来への危機感が実践の契機となったことが明らかになり、生徒たちの声からは自身が育った村のことを知るきっかけになったこと、発表の準備は通常の授業とは異なる経験をする機会となっていたことを解明することができた。

つづく第3章A節では、第2章で明らかにした実践を総括し、それらの実践を、学校の中に留まらず、子どもたち自身が学校外に積極的に出て行き、地域の中で地域の人々との関わりを通して地域について学び、そして地域へ発信していくという学習活動として意味づけた。そして、学校から村(地域)へという動きが可能性として見られる一方で、子どもたちからの働きかけを村の大人たちが十分に受け止めていないこと、すなわち、村(地域)から学校へという方向の働きかけをどのように創出していくかが課題として浮か

び上がった。

これをふまえ、第3章B節では、まずこの2年間の木島平村でのコミュニティ・スクール準備過程を資料から振り返り、現在進められているコミュニティ・スクール化の議論と、地域と結びついた授業実践とをどのように結びつけることができるかを考察した。

本稿の知見として以下の点を示した。

コミュニティ・スクールのあり方に関して、先行研究においては、学校支援の側面からもガバナンスの側面からも、地域住民が関わることによって学校がどのように変化するのか、そこでの成果と課題が中心的に語られてきた。それに対して、木島平村でのコミュニティ・スクール構想は、以前から進められてきた、学校から地域へと働きかける動きを持った地域学習を土台とすることが可能であると考えられる。このことはすなわち、現在の学習活動を活かして村づくりまで考えようとする点、さらに、そのような活動をコミュニティ・スクールを通して持続できるという点で、地域とともにある学校の新たなあり方を提示している。

5. 今後の課題と展望

本稿の残された課題として、実践を詳細に見たときに明らかとなった教師と地域住民の間の緊張関係について、具体的な検討にまで至っていない点が挙げられる。緊張関係の理由はどこにあるのか、そして実践における緊張関係はコミュニティ・スクール化にどのように影響を与えるのか、地域と学校の関係をめぐる重要な論点が残されている。

また、子どもが村の運営に関わっていかうとすること自体について、本稿では慎重な議論を重ねられていない。シティズンシップ教育に関する研究蓄積とも合わせて、子どもが学校運営、村運営に参画していかうとすることに配慮すべき点、より重視すべき点などを検討することが今後の課題である。

今後の展望としては、今回考察したことを木島平村に対してどう提示していけるのか、例えばどのような学校運営協議会のあり方が望ましいのかなどについて、検討を進めていきたい。

そして、今回得た知見を他地域にも活用していかうと考えたとき、地理的条件も合わせてさらに精緻に分析していくことは必要不可欠であり、木島平村だからこそできることと、ある程度一般性をもっていることを十分に区分けしていくことも進めていきたい。